別紙様式

令和4年度　学校評価表

（　中間　）

学校名　三原市立沼田西小学校

校番（　13　）

a　学校教育目標	「自ら伸びる」児童の育成 ～わくわく登校，満足下校～	b　経営理念 ミッション・ビジョン	【ミッション】（自校の使命） 自分を愛し，夢を語る児童の育成 【ビジョン】（自校の将来像） 夢や目標に向かって，自ら伸びようとする児童を育成する学校 【育成を目指す資質・能力】○知識及び技能　○思考力・表現力　○主体性

評価計画						自己評価					改善方策	学校関係者評価			
	c　中期経営目標	d　短期経営目標	e　目標達成のための方策	f　評価項目・指標	g目標値	10月 h達成値	2月 h達成値	i達成度	j評価	k結果と課題の分析	改善方策	評価 イ	評価 ロ	評価 ハ	コメント
確かな学力の育成	主体的に学びあう児童を育成する。	○児童自らが目標や課題を設定して，その実現や解決に向け主体的に取り組む能力や意欲・態度を育成する。	○問いの設定に視点をあてた授業改善を行い，児童の思考力・表現力の育成を行う。	①教師の肯定的評価 (1)「児童の問いから始まる授業を行っている。」 (2)「児童に問いをもたせる工夫を行っている。」	① (1)100% (2)80%	(1) 88.9% (2) 100%		(1) 88.9% (2) 125% **107%**	A	今年度から，研究主題を「思考力・表現力を育成し，深い学びに向かう授業の工夫 ～『問い』から始まる授業づくりを通して～」とし，児童の問いから始まる授業づくりに取り組んでいる。研究を進めていく中で，職員の意識が高まり，日々の授業でも児童の問いを意識した授業が積極的に実践されている。 その結果，教職員アンケート「児童に問いをもたせる工夫を行っている。」については，100%の肯定的な解答を得られた。「児童の問いから始まる授業を行っている。」については，88.9%の肯定的な解答を得られたが，目標の達成まであと1名足りなかった。	今後は，校内研修を通して，現在行っている取組を更に充実させていく。まず，児童の問いから始まる授業とはどのような授業なのか，理論研修や研究授業を行い教員間でイメージを共有する。そして，そのイメージを児童とも共有し，児童の問いから始まる授業を行う。 児童に問いをもたせる工夫については，肯定的な解答が100%だったため，引き続き児童の実態に合った導入や支援を行う。	6	0	0	改善方策を基本に引き続きの取組をお願いしたい。 「問い」から始まる授業は児童が主体的・意欲的に学習に取り組むことができ良いテーマだと思う。 しっかり共有してさらに深め，思考力・表現力を育成してほしい。 アシストシートを利用しての帯タイムの学習は短時間に集中でき有効であると思う。同時に1時間の授業を充実して確実に力をつけてほしい。 日々の研究・工夫を繰り返し児童の学力向上の為に取り組んでいる姿は素晴らしいと思う。 問いから始まる授業への取組，問いが解決できた時の達成感は満足ができる楽しい授業になると思う。 「問いから始まる」「問いをもたせる」と教育研究を「問い」に焦点化して取り組まれている様子がよく分かった。児童の肯定的評価も高く，今後の授業づくりの成果に期待したい。
				②児童質問紙肯定的評価の割合 「自分達で問いを作ることができている。」 「クラスの友達と話し合って，問いを解決しようとしている。」 「問題を解く際には，これまでに学んだことや経験したことを使おうとしている。」	②80%	84% 91% 91% 88.7%		111%	A	児童アンケート「自分達で問いを作ることができている。」については84%，「クラスの友達と話し合って，問いを解決しようとしている。」と「問題を解く際には，これまでに学んだことや経験したことを使おうとしている。」については91%の肯定的な回答を得られ，全ての項目で目標を達成することができた。職員間で意識統一をして指導していることが，児童の習慣化につながっていると考える。 一方で，「自分達で問いを作ることができている。」については目標値80%を達成してはいるものの，他の項目よりも低い数値である。子供達の中で「自分達で問いを作ることができている。」とはどのような姿かが共通認識されていないことが原因と考えられる。	「自分達で問いを作ることができている。」については，「問い」とはどのようなものなのか児童が理解できていないことが考えられるので，児童の問いから始まる授業とはどのような授業なのか，児童とイメージを共有する。また，日々児童の問いから始まる授業を行い，問いを作ることに慣れさせる。さらに，児童が問いを作った際に肯定的に受け止めたり，授業の最後に問いを解決できたという達成感を得られるように声をかけたりする。	6	0	0	
			○各種学力調査に向けた対策や，算数科の思考力・判断力・表現力のテストの分析を通して，学力の向上を図る。	①全国学力・学習状況調査　全国平均値以上 ②標準学力調査　標準値＋3ポイント ③単元末テスト　思考力・判断力・表現力等　学年平均通過率　80%以上	① 全国 平均以上 ② 標準値 +3P ③ 80%以上	①国語 62% 算数 60% 理科 66% ②未実施 ③85.3%		① 国語95% 算数95% 理科104% 3教科98% ②未実施 ③107% **103%**	A	全国学力・学習状況調査の本校の通過率は，国語科62%（全国65.6%），算数科60%（全国63.2%），理科66%（全国63.3%）だった。全国平均以上という目標の達成度は国語科95%，算数科95%，理科104%で，理科のみ達成した。 国語では，読むこと（正答率50%，全国比75），書くこと（正答率55.6%，全国比114）に課題があった。特に物語の読み取りと漢字の変換に課題があった。算数では，データと活用（正答率55.6%，全国比81），数と計算（正答率61.1%，全国比88），変化と関係（正答率55.6%，全国比101）に課題があった。 1学期の単元末テストでは，研究教科である算数科の思考力・判断力・表現力等の学校全体の平均通過率が85.3%で目標の80%を超えることができた。しかし，学年別にみると，目標の80%に達していない学年もあった。	どの教科でも，前学年までの学習の積み残しと，長文問題を読み取ったり考えを表現したりすることに課題が見られた。そこで，アシストシートを利用し，学力の定着と底上げを図る。アシストシートには，全学年が帯タイムに現在の学年の2学年前の学習に遡って取り組む。問題に取り組ませた後は，必ず解説を行う。 単元末テストについては，全学年が目標を達成できるように，文章問題に取り組ませる機会を増やす。また，前学年の積み残しを解消し，正しく計算できるよう，アシストシートを活用する。問題に取り組ませる際には，分かっていることや求めることに線を引かせたり，図に表させたり，図と式を対応させたりもする。さらに，学力向上に効果的だった取組を教員間で交流する。	6	0	0	
豊かな心・健やかな体の育成	○様々な人や事象との関わり合いを通して，豊かな人間性と健やかな体を培う。	○沼田西小学校「五つの宝」に取り組む。	○地域と連携し，地域の宝を生かした学び『沼田西学』を通して，児童の自己有用感，共感的な人間関係，規範意識を培う。	児童質問紙肯定的評価 (1)「自分のことが好き」 (2)「自分には相談できる人や助けてくれる人がいる」	90%	(1)72.6% (2)95.8%		(1) 89.9% (2) 125% **107%**	A	（1）の「自分のことが好き」の肯定的評価が低く，昨年度末より9%下がっている。「自分に自信がない，自己肯定感が低い」児童が多いと考えられる。その児童は，自分を他と比べて評価する傾向にある。昨年度も，アンケート結果から個に焦点を当てて取り組んだが，改善されていない児童が多い。 （2）については，昨年度より数値が向上した。。コロナ禍において，家庭で過ごす時間が増えて心配な面もあったが，家庭や学校が，環境づくりを進めてきたからだと考える。 ①の「地域のためになることをやりたい。」は，ほぼ目標に達した。地域への発信は，コロナ禍のためできにくくなっているが，児童会中心に行った「敬老の日」の取組が，児童自身の意識を高めたと考える。	児童の自己肯定感を高めるために，以下のことに取り組む。 ①学級会等で，自他の良さを見つけ合う活動・学習を仕組む。 ②学級平均ではなく，個に焦点を当て，自分を好きになれない要因を分析し取り組む。 地域への愛着を深めるために，以下のことに取り組む。 ①「総合的な学習の時間」の計画の中にある地域学習では，ねらいや振り返りを大切に実施し，来年度の計画に生かす。 ②「エヒメアヤメ」や「ホタル」，「防災学習」については，次の学年に引継ぎを必ず行う。	6	0	0	学校での取組とともに，地域・家庭との連携が必要である。学校と保護者の連携さらに進めていただけたらと思う。 「地域のためになることをやりたい」という児童が多い事はうれしい事だ。コロナ禍でできることが限られる中，児童会などよく取り組めている。 継続は力なりで，毎日目標をもって取り組めば成果は出ると思う。粘り強く体力向上に取り組もうとする姿勢が伺える。 体力向上に向けてアクティブタイムの導入や週末プラスワンの実施を継続して取り組んでいただくことでよい結果が得られることを期待している。 児童の自己肯定感が低く，昨年度末より下がっているのが気になる。示された改善方策の地道で具体的な実施をお願いしたい。 アクティブチャイルドプログラムの導入など，体つくりが学校組織として取り組まれており，すばらしい。 自他のよいところを見つけ合う活動は社会人になっても，必要な事と思う。継続していただきたいと思う。 外遊びをする子供をあまり見かけなくなった。体力向上のためにも運動の取組をお願いしたい。
		○友達や故郷を愛する心情を育てる。	○地域と連携し，地域の宝を生かした取組を推進し，郷土を愛する心や，地域の役に立ちたいという児童を育成する。	児童質問紙肯定的評価 ①「沼田西町のためになることをやってみたい」	90%	88%		98%	B			6	0	0	
		○健康で活力ある生活を送るための基礎を培う。	○外遊びや授業でのACP（アクティブ・チャイルド・プログラム）を励行するとともに，体育的な特別活動を工夫して行う。	①教師の肯定的評価 （1）「運動に慣れ，楽しみながら活動できる取組を取り入れている。」 ②児童質問紙肯定的評価 （1）「進んで外遊びをしたり体を動かしたりしている。」 （2）「体を動かすこと（運動）が好きである。」	① (1)90% ② (1)80% (2)80%	① (1)88.9% ② (1)83.2% (2)91% 平均 87.1%		①98.7% ②100.8% **99.8%**	B	①の教師アンケートは目標に達しなかったが，②の児童アンケートは目標に達した。外遊びだけでなく，アクティブ・チャイルド・プログラムをのびのび朝会で取り組んだり，児童会主体で企画したりしたことが要因だと考える。 一方で，アクティブ・チャイルド・プログラムを学級単位で取り入れている学級は少ない。保健体育生徒指導部からの提案だけでなく，児童会や体育委員会から遊びを提案し，学校全体で取り組む活動を引き続き取り入れていく。	教職員に対して，且つ児童へ運動に慣れたり楽しみながら体を動かすことができるよう，以下の点に取り組む。 ①のびのび朝会で運動遊びの紹介 「体じゃんけん」や「あっちとんでぴょん」など，オンライン上でも全校でできる運動遊びを実施する。 ②ロング昼休憩でアクティブ・チャイルド・プログラムに取り組む。 全校で遊んだり縦割り班で遊んだりできるよう，児童会や体育委員会を中心に実施していく。 ③校内研修の実施 学期に1度，アクティブ・チャイルド・プログラムの研修を行い，学期に1度は学級でアクティブ・チャイルド・プログラムを実施するようにする。	6	0	0	
			○体力テストで明らかになった課題解決に向けて，準備体操やサーキットトレーニングを見直し，走・握力・柔軟性の定期的測定を行う。	「50m走」「握力」「長座体前屈」の種目で，昨年度の学年平均値以上の児童の割合	80%	50m 36.9% 握力 39.8% 長座 38% 平均 38.2%		48%	D	今年度から指標を「昨年度の学年平均値以上の児童の割合」としている。3つの測定項目ともに目標に及ばなかった。6月の測定時に比べて低下している学年や項目もあり，やはり，昨年度と同様9月の測定は，夏休みと熱中症指数の上昇のための外遊び禁止による運動不足が要因であると考える。ただし，昨年度の指標「平成31年度の全国平均値以上」で見ると，平成31年度の記録は超えている児童の割合は3つの平均で52.2%，達成度は65.2%（C）である。	体力向上（特に握力，50m走）のために，以下の点に取り組む。 ①朝の会や帰りの会での「アクティブタイム」の導入 各学級で「グー・パー運動」「指ハイタッチ」「レッグランジ」を1分間程度毎日取り組む。 ②週末プラス1（運動の宿題）の実施 夏休みに行ったがんばりカードを，週末にも位置付けて取り組むことで，継続的に体力の向上を目指す。 ③講師の招聘 短距離走の正しい走り方や早く走れる方法や食事面についてご指導いただく。	6	0	0	
信頼される学校	○保護者の願いに応え，信頼される学校づくりを推進する。	○協働的な学校運営を行う。	○年間計画表を指標として，主任の機能化と部会の活性化を図り，PDCAサイクルにより協働的な学校運営を行う。	教職員自己評価肯定的評価 (1)「2部会などの参加を通して協働的な学校運営に取り組んだ。」	100%	100%		100%	A	教職員アンケート「2部会などの参加を通して協働的な学校運営に取り組んだ」の肯定的評価は100%だった。引き続き，各部において年間を見通した活動を示し，教職員が意識的に協働的な学校運営に参画するよう取り組んでいく。 「業務の効率化を図り，児童と向き合う時間の確保につなげた」に対しての肯定的評価は100%だった。また，4月から9月までの時間外在校時間平均43時間以内については6か月平均29.5時間となった。退勤時刻を決め提示したり，声をかけたりすることで職員が時間を意識して勤務することができている。しかし，延べ人数でみると，4月から9月において5人/78人が，45時間(広島県『学校における働き方改革の推進』における目標値）を超えており，行事の多い2学期においても見通しをもって業務の効率化を継続していく必要があると考える。	①協働的な学校運営に情報の共有と見通しをもった取組は欠かせない。A評価になっているものの，引き続き業務内容の優先順位，ICT等を使用した視覚化・効率化などの視点から働き方改革を進めていく。 ②児童に関わる様々な業務への時間確保は確実に進んでおり，その時間が児童と向き合うことにつながっている実感を教職員自身が持てるよう，今後も継続して業務の効率化と内容の充実に努めていく。	6	0	0	教職員のみなさんは健康管理に十分気を付けていただきたいと思う。 二部会を中心に協働的に学校運営がされ，児童に向き合う時間の確保につながっていることが伺えた。 多岐にわたる多くの業務をこなしながら時間を意識して勤務することは大変な事だと思う。 楽しい学校生活に向けて保護者との連携は大切です。信頼が大事と思っている。 働き方の課題は，個々の職員の在校時間に現れることから，平均値での評価では改善されない。45hを超える職員の働き方や校務分掌を見直す取組が重要である。
		○子供と向き合う時間を確保する。	○組織的に業務改善を推進し，子供と向き合う時間を確保する。	①教職員自己評価肯定的評価 (1)「業務の効率化を図り、児童と向き合う時間の確保につなげた。」 ②教職員の時間外在校時間平均43時間以内	①90% ②100%	① 100% ② 100%		①111% ②100% **106%**	A						

【j：自己評価　評価】
A：100≦（目標達成）　B：80≦（ほぼ達成）＜100
C：60≦（もう少し）＜80　D：（できていない）＜60

【l：学校関係者評価　評価】
イ：自己評価は適正である。
ロ：自己評価は適正でない。
ハ：分からない。